

『御曹司のおいしくてキケンな恋避行』

著：森本あき

ill：明神 翼

「あの…シェフさん！」

綺士は一心に何かを切りつづけているシェフに声をかけた。ほかにだれもいないんだから、しようがない。だけど、シェフは聞こえてないのか、包丁を置かない。

「すみません！ シェフさん！ あのー！」

さっきより声を大きくすると、シェフが綺士のほうを振り向いた。

うわっ、カッコいい！ 振り向くと、一段とカッコよく見えるね、この人！

「あ、俺を呼んだ？」

そして、すごいフランクに話しかけてくる。さっき、オムライスを置いたときとは全然態度がちがうんだけど。

「はい！ このお店のシェフさんですよ？」

「ん？ 俺、結婚してないよ？」

…なんだろう。まったく話が通じてない。結婚してますか、って、ぼく聞いたっけ？ 聞いてないよね？

「シェフさんですか？」

もっと、はっきりと言葉にしてみよう。

「シェフ！ シュフかと思った」

シュフって奥さんのこと？ え、もしかして、この人、女性なの？ 見かけが男らしいだけ？

「シェフでもシュフでもないけどな」

「シェフじゃないんですか!？」

あまりの驚きに、綺士は目を丸くした。ということは、もっと上手な人がいるってこと？ それ、すごくない？

「シェフって、もっと堅苦しい店の料理人のことだろ？ 定食屋の店長に使う言葉じゃねえよ」

「え…、そうなんですか？」

どんなお店でも、一番えらい料理人がシェフだと思っていた。ちがうんだ？

「まあ、そんなことはどうでもいいや。俺に用？」

「あ、はい！ オムライス、とってもおいしかったです！ ごちそうさまでした」

綺士は、ぺこり、と頭を下げた。

「お代はどなたに支払えばいいんですか？」

店員さんがいないので、あの面白そうな機械のところに行ってもムダだろう。

「あ、全員、休憩行かせたんだった。じゃあ、俺が受け取っとくわ。オムライスって、いくら

だ？」

「えーっとですね…」

綺士はメニュー表を見た。

「七百円です」

「ぴったりある？ それとも、お釣りがいる？」

「お財布を見てみます」

綺士は胸ポケットからお財布を出す。日本はまったくカード社会じゃないので、いつも、ある程度の現金は持ち歩いていた。読みたい本があって本屋で買うときとか、カードよりも現金のほうが処理が速い。カードだといちいち伝票にサインしなきゃいけないくて、めんどくさくてしょうがない。だったら、お札を出してお釣りをもらうだけのほうが簡単でいい。

お財布の中を見ると、小銭がたくさんあった。いつの間に、こんなにたまっていたんだらう。現金で買い物をするのは本屋ぐらいなので（学校では一切お金を使わない。何かを買うときも、寮の部屋番号を言うだけでいい。そのすべての請求が親にいくようになっていた）、なるべく細かいのがたまったら使うようにはしているけれど、このところ、いろいろめんどうになっていて、ずっとお札を出していた気がする。

命を狙われるのって、本当に厄介だ。普段の生活のちょっとしたことですら、やる気がなくなる。

「ちょうどあります」

綺士は七百円をカウンターに置いた。

「あ、助かる。ありがとう」

「え、なんでお礼を言われるんですか？」

綺士はきょとんとする。

「あんなに美味しいものを食べさせてもらったのは、ぼくなのに。あ、ぼくがお礼を言わなきゃいけないんだ。おいしいオムライスとお味噌汁をありがとうございました！」

綺士はぺこりと頭を下げる。

「おまえ、変わったやつだな」

シェフ…じゃないのか、じゃあ、どう呼べばいいんだらう。とにかく、オムライスを作ってくれた人は、びっくりしたように綺士を見る。

「ただのかわいい子供だと思ってたら、妙に礼儀正しい」

かわいい…。よく言われるけど、あんまり嬉しくないんだよねえ。だってさ、ぼくは男なんだよ？ 見かけはかっこいいほうがよくない？

綺士は母親の若いころによく似ているらしい。写真を見せてもらったら、たしかにそっくりだった。母親は周囲にも評判の和風美人で、いまも十分にきれいだ。着物がよく似合う。

それを受け継いでいるので、自分で言うのもなんだけど、綺士も顔が整っている。ただし、目だけはだれに似たのか、すごく大きくて二重だ。母親がしゅっとした切れ長の一重なのがうらやましい。目がもうちょっと細かったら、かわいい、って評されることもなかったらうに。

鼻は高くて筋も通ってるし、唇は少し薄めで血色がいいせいかわ赤い。そこにくっきり二重のく

りっとした目がついてたら、かわいい以外の感想がない。それはしょうがない。

おかげで海外では、かなり年下に見られる。ものすごく幼く思われて、一人で街を歩いていたら、親の育児放棄で警察を呼ばれそうになったこともある。

童顔なのも困ったものだ。

初対面の人にも、こうやってかわいって言われるし。

…ま、もう慣れたからいいんだけど。

「本当においしかったので」

綺士が念を押すと、シェフ…じゃないのか、とにかく、作ってくれた彼はにっこり笑った。

「それはよかった」

その笑顔が本当に嬉しそうで、綺士まで嬉しくなってくる。

「ところで、なんで、この店に来たんだ？ 初めてだよな？」

「はい！」

へー、来た人のこと覚えてるんだ。ますますすごいシェフ…ああ、もう、こっちを先に解決しよう！

「あの、シェフさんじゃなければ何なんですか？」

「俺？ 元木和剛。よろしく」

手を差し出されて、綺士は思わず握手した。これは完全なる条件反射。

「この食堂の店主。シェフみたいなえらいやつじゃないよ。シェフって、どこそこの店で何年修業しました！ とかだろ？」

たしかに、それはそうだ。

「俺は、親がやってた食堂を継いだだけだし」

「ああ、元木さん！」

のれんに『元木食堂』と書いてあったのを思い出した。そうか、元木さんが作ってるから、元木食堂なんだ！ すごい！ お店の名前にそういうつけ方をするのってめずらしくない？ シェフの名前がついてるの…、あ、でも、いつか行った天ぷら屋さんがシェフの名前だったな。あのときも、めずらしい、と思ったものだ。

「ん？ どうした？」

あ、名前を呼んだと思われたみたい。

「すみません、お名前を呼んだわけじゃなくて、『元木食堂』の元木さんなんだな、って、ちょっと感動してたんです」

「感動？ なんで？」

「そういうお店をあまり知らないのです」

というか、その天ぷら屋さん以外は記憶にない。

「おまえ、いいとこのぼっちゃんだろ？」

元木がにやりと笑った。え、なんでわかったんだらう、でも、認めないほうがいいのか、ごまかそうかな、と元木を見ると、確信ありげな表情をしている。綺士は嘘をついてもむだだと悟った。

「…わかりましたか？」

綺士は、自分の体を見下ろしてみる。たとえば、服装が高価だとか？ でも、普通のジャケットにシャツとズボンなんだけどな。たしかに、どれもブランド物だけど、一目見てわかる感じでもないと思う。

態度が変？ 言葉づかいがちがう？

どこで見破られたんだらう。

「メシを、すごいきれいに食べてたから。姿勢もぴしっとしてるし、スプーンも箸もちゃんと使ってる」

ちゃんと使う？ どういうこと？

「箸の持ち方が正しいやつらは結構たくさんいるけど、スプーンまできれいに持つのって、そういないだよな。おまえは…名前なんて言うんだ？」

「姉小路です」

綺士、とは名乗りたくなかった。だって、絶対にバカにされるか、笑われる。そういう経験は何度もある。

「うわ、名字まで金持ちっぽい。名前は？」

言いたくないです。でも、聞かれたからには答えないと、というのが、なぜか綺士の中にはあって、だから、小さな声で告げた。

「…綺士、です」

「へー。騎士のナイト？」

「字はちがうんですけど。あの、綺麗のキに武士のシで綺士です」

「ん？」

元木はメモ用紙を出した。そこに綺士と書く。

「これ？」

「あ、そうです」

「へー。すごいかっこいいな」

いえ、それにはいろいろとあって…、と言いかけたところで、はたと止まる。

いま、かっこいいって言った？

この名前を聞いて、最初にそう言ってくれる人はめったにいない。ちょっと嬉しいかもしれない。

「俺の名前、こう書くの」

元木は、綺士の下に、和剛、と書いた。これで、カズタケと読むのか。いい名前。

「すごい堅苦しいだろ？」

「そんなことはないです！ いいお名前です！」

綺士も、こんなまともな名前がよかった。どう読むの？ とか、なんで、そんな名前なの？ とか、ぷっ、と噴き出されるとか、そういうことがない名前にあこがれる。

「やっば、他人の名前ってよく見えるんだな。俺も綺士って名前だったらよかったよ。綺士さん、って後輩とかから呼ばれるの、すげーかっこいいじゃん！」

それは、ずっとこの名前で生きてないからですよ。でも、やっぱり、ほめられたら悪い気はしない。笑われるよりはましだ。

「じゃあ、綺士って呼ぶな」

いえ、困ります、とは決して言えそうもない。そして、別に困らない。たいていの人からは綺士と呼ばれてるんだし。

「スプーンってさ、持って食べればいいだけだから、一見、簡単そうに見えるんだけど、きれいに使っているやつって、実はそんなにいないんだよな。綺士はスプーンの持ち方だけじゃなくて、腕の角度までちゃんとしてて、この子、きちんとしつけられてる、とすぐにわかったよ。全体的な食べ方もきれいだし」

わ、すっごいほめられてる！ 綺士にとっては普通にしてるだけのことを、ここまで賞賛されると、ちょっとこそばゆい。でも、嬉しいな。そこまで見てくれてたなんて。

「で、たぶん、こんなお店とか入ったこともないおぼっちゃまが、いったいなんの用？」

「あ、そうだ！ 電話を貸してください！」

すっかり忘れてた。

「電話持ってねえの？」

「持ってますけど、車の中に置き忘れて」

「え、車ってタクシー？ それ、大丈夫か？」

元木が心配そうに綺士を見た。とてもいい人なのが伝わってくる。

「いえ、自分の車なんですけど…」

「じゃあ、その車に取りに行けば？」

うん、普通はそうだよな。

「それが、できない事情がありまして」

まさか、追っ手から逃げるためにその車から飛び降りた、なんて言えない。

「ん？ 誘拐されたところを命からがら逃げ出してきた、とか？ だったら、この辺と無縁なのに、この店までたどり着いたのも説明がつかない」

「この辺と無縁かどうかわからないじゃないですか」

誘拐された、以外はあっている。この人、すごく鋭いな。料理がうまくて頭の回転が速いなんて、尊敬する。

男としてカッコいいし、絶対にもてるよね？

「この辺はそこまで土地が高くないから、綺士みたいな金持ちはいないんだよな。だから、わかる」

へえ、そうなんだ。でも、どの家もすごく豪華というわけではなかったし、そう言われたら納得できる。

「まあ、電話ぐらいならいくらでも使っていていいよ。ちょっと待つてな」

元木が奥に引っ込んだ。戻ってきたときは、コードレス電話を手に持っている。

よかった！ これで運転手と連絡が取れる！

「ありがとうございます！」

綺士はその電話を受け取ろうとした。

「ただし」

元木が、ひょい、と電話を遠ざける。

「お金持ちのおぼっちゃまに電話を貸して、そのせいで、誘拐犯にこの店を襲撃されても困るからな。そうじゃないことを証明してくれるか？」

「証明…」

「いったい、どうやって？」

「なんで、ここに来たんだ？」

「誘拐されてはいないですけど、命を狙われてます」

「こういうときは作り話をしないほうがいい。どっちにしろ信じてもらえないんだから、本当のことを言っておけばいいのだ。」

「へえ」

元木がキッチンから出てきた。そのまま、綺士の隣に座る。

「詳しく聞かせろ」

元木の目はきらきらと輝いていた。

「え、もしかして、信じてくれたの？ 嘘でしょ？ 自分でも、ありえない、と思ってるのに。」

「そしたら、電話を貸してやる」

「今日会ったばかりの他人にするような話では、絶対にない。でも、電話を貸してもらえないと困る。」

「どうしよう、と迷ったのは一瞬だった。」

「この人とはもう二度と会わない可能性のが高いんだから、全部打ち明けてしまえばいい。」

「親にも話せないでいたこと。」

「親はとっくに解決済みだと思っていること。」

「なのに全然そうじゃなくて、いまも大変な目にあっていること。」

「それをすべて。」

「わくわくと綺士の話を待っている、この人に。」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>